めいろうこどもえん　６月園だより

２０２２年度 年主題　〈つながって　～今、わたしを生きる～〉

0･1･2歳児６月主題　「めをとめて」

月のねがい

◎保育者の祈りやさんびかを歌う姿を見る(0)◎様々な自然に触れ、親しみ、身体で感じる(0)◎周りのものや人に興味をもちはじめる(0)
◎保育者の祈りの言葉に心を合わせようとする(1.2)
◎保育者や友だちのしていることに目をとめ、興味を持つ(1.2)
◎好きな場所、人、ものに関わろうとする(1.2)

3･4･5歳児６月主題　「探ってみる」

月のねがい

◎さんびかや聖書の話、身の回りのことを通して、神さまの存在を感じる(3)
◎時間や空間を十分に与えられて、やってみたいことをたっぷり楽しむ(3)
◎砂場や絵の具、体を動かすなど、いろいろなことを試してみる(3)
◎興味を持ったことを一人でまたお友だちと一緒に、考えたり調べたり、大人に聞いたりする(4.5)
◎嬉しいときにも、悲しいときにもお祈りをする(4.5)
◎葛藤や挫折も通りながら考え、手や体を動かすことを重ね、ゆっくりと様々なやり方を身につけていく(4.5)

今月の聖句　「わたしたちは互いに愛し合いましょう。」

Ⅰヨハネ4：7

私たちは今、混沌とした時代に生きています。コロナにしろ、ロシアによるウクライナ侵攻にしろ、思わされるのは、世界が様々な形でつながっているという事実です。その繋がりの中で、良い影響を受け、相乗効果で互いに恵まれることもあれば、その逆で、負の連鎖に巻き込まれ、大きな損害を被ることもあります。

聖書は私たちに「互いに愛し合いましょう」と勧めます。なぜならば、本来神の愛によってこの世に存在するようになり、神の愛によって慰めを受け、生かされているのが私たちだからです。その愛をしっかりと自分で受けとめ、自分の中に満たしていただいて、その愛でもって、人々に接する者であるように、聖書は勧めるのです。

シャンペンタワーを想像してください。一番上に一つのシャンペングラスがあり、その下にピラミッド型にグラスが連なります。そこにシャンペンでもワインでもジュースでも、それを注ぐ時、上から下のグラスに液体が伝わって、それぞれのグラスを満たしていきます。グラスから溢れ出たものがこぼれてもったいない、ではなくて、そのこぼれたものが他のグラスを満たしていく。そのグラスからこぼれたものも別のグラスを満たしていく。そのような連鎖が生まれます。同じように、私たちが互いに愛し合う時、そこに愛の連鎖が生まれます。家庭の中で、友人付き合いの中で、職場の中で、愛の連鎖に生きる者にさせて頂きたいものです。

協力牧師　池田基宣

パパ

パパは　まいにち　かいしゃで
おすなばあそびをしているんだよ
だって
おくつに
すなが　はいっているから
わかるよ
いまごろ　ママのかおを
かいているのかなあ

5歳女児

６月の行事予定

４日（土）	熊毛地区教職員研修会
８日（水）	歯科検診(13:30～)
１６日（木）	６月生まれ誕生会（10時～）
２２日（水）	**弁当日**
２５日（土）	夏祭り実行委員会（10時～）

７月の行事予定

２日（土）	夏祭り
６日（水）	海あそび(4.5歳)･**弁当日**
７日（木）	七夕事業所訪問
８日（金）	海あそび(2.3歳児)
１４日（木）	市営プール（4,5歳児）
１５日（金）	７月生まれ誕生会（10時～）
１６･１７日	お泊まり保育
２０日（水）	１学期終園式(1号:午前保育)

５月を振り返って…

あっという間に６月を迎えました。あちらこちらとウロウロしていたお友だちも、ようやく居場所を見つけ笑顔も増えてきました。爽やかな5月の空の下、シャボン玉が一層きれいに見えます。シャボン玉の優しい雰囲気に魅了され、楽しんでいた子どもたちです。６月は雨が多くなる季節。その中でも子どもたちの気分だけはスッキリできるように、楽しい保育計画を立てていこうと思います。

さて、新入園児が最初に大きな壁にあたるのが、給食の野菜でしょうか？本年度、私はすみれ組で給食を一緒に食べています。そこで気付くのは、初めて食べた食材に対する食感の違和感ではないかと思われます。４月は、「食べたくない！」と、泣いたり拒否したりのお友だちでした。職員も、新しい食の世界を知ってもらいたいという思いで、少しでも味わえるよう小さくしたり、量を少なくしたりと、あの手この手の毎日です。ご自宅でもそうですよね。先月の食事調査でも、お母さんたちが悪戦苦闘している様子が伺えました。私は、以前から食が細い子や野菜が苦手な子には、「先生と一緒に食べよう！せーの！」と言って一緒に食べています。そして、その後にものすごく大きなリアクションで「美味しい～!!!」と表現します。食べた後のリアクションが見たいのかどうかはわかりませんが、子どもたちはその次も同じように食べてくれます。そして、この様子を見ていた周りの子どもたちも輪に加わります。嫌いなものだけではなく、大好きなヨーグルトも「せ～の！」と言って食べると、それはそれは大喜びです。

先日、すみれの女の子が「『せ～の！』しよう！」と言って、ワンスプーンでしたが一緒に食べることができました。４月は泣いていたのに･･･。「せ～の！」や「いっしょに！」という言葉は、なんでもない言葉ですが、もしかしたら子どもたちにとっては、寄り添ってもらえる勇気のでる言葉に聞こえるのかもしれません。言葉は、相手に気持ちを伝えるためのとても大事なもの。ネガティブな言葉よりも子どもたちが喜ぶような、目がキラキラするような、やる気がでるような言葉をたくさん伝えてあげたいものです。でも、これがなかなか難しいもの。私も離れて暮らしている息子たちに、「よっしゃー！」とやる気になってもらえるような言葉を、限られた時間の中で伝えたいと思っています。先月は、家庭訪問や面談、フリー参観のご協力をいただきありがとうございました。園での普段の様子を見ていただけるフリー参観は、職員にとっても良い時間となりました。何かお子さんのことで気になることがありましたら、いつでも遠慮なくお声をかけてくださいね！

主任：森山

主体性を育む生活

昨年は、随分早かった梅雨入りも、今年は今のところまだのようですね。雨という字は、垂れ下がった雲から雨が降っている形の分かりやすい象形文字です。日本語には雨を表す言葉が四百以上あるそうです。春雨、霖雨、驟雨、小糠雨等々。青葉に降り注ぐ雨のことを翠雨（すいう）と聞けば、雨の印象も素敵に感じます。暫くは、子どもたちと一緒に、雨とお友だちになって楽しみたいと思います。

植物の命は「水」です。植物を形成する細胞の化学反応は水を媒介として行われますが、成長に必要なあらゆる物質も、また水によって生物体の内部に運ばれます。木々に水を提供し続けるのは「根」です。雨量が多く強風の少ない地に育つ木は、そびえ立つような大木でも、たまに強風が吹くと簡単に倒れてしまうそうですが、地下水が深いところにあるような場所では、根も長く伸びていき、幹をしっかりと支えられるのです。苦しみや試練に出会った時、それを乗り越えられる力を得るのは、安易な水の補給ではなく、深く根を伸ばすための心の葛藤や克己心ではないでしょうか。見えないところの育ちに祈りを込めて保育にあたっていきたいものです。一般に「幼児教育」という言葉からは、「教育・指導によって何かができるようにする」というイメージがあるような気がします。保育者が主導して多くの課題を与え、計画された何かによって力が付いてくるというものです。確かに以前はこの様な”させる保育”が主流であったかもしれません。いやそれ以上に、潜在能力開発的な”見せる”保育も多く見聞きします。早い発達や目に見える達成度に期待を寄せる保護者の願いも理解できますが、内面の育ちに寄り添うことが疎かになる危惧もあります。子どもを、自分の思いを持つ一つの主体として捉えるならば、自らの意志であそびを選び、創り出し、遊び込む中で得る自信や意欲というものこそ、真に大切にしたいものです。「先生、見て！来て！」と、自分の存在を認めて欲しいと願う気持ちこそ、自律ある育ちの原動力ではないでしょうか。幼稚園協会熊毛地区における本年度研修テーマは「子どもの主体性がいきる保育者のかかわり」です。家庭では経験することの少ない様々な対象との関わりや自然との触れ合いはとても大切です。遊びを中心とした幼児期にふさわしい生活をしっかりと担保していきたいと思います。

さて、子どもたちはずいぶん園生活にも慣れてきました。朝の礼拝や体操にも落ち着きが感じられます。それぞれに集団の中での自分というものにも何かを感じてきているようです。日々の経験から得る「驚き」や「気づき」が興味を広げていきます。心地よい環境の中で、心身健やかに育つ子どもたちの笑顔が目に浮かびます。少々うっとうしく感じる日々が続きますが、早寝・早起き・朝ごはんで元気に登園できますようご協力をお願いいたします。

園長

子どもの育ちと「ことば」

先月は赤ちゃんは、泣くことによって自分の気持ちを整理し、ことばにつなげていくことを書きました。今月号からは、子どもの育ちと「ことば」について考えていきたいと思います。

赤ちゃんは生後２～４日ほどで母親の顔を覚えるといわれています。大人が舌を出したり、口を開けてみせると、同じような表情をする新生児模倣があります。赤ちゃんは特に人に対して敏感な反応を示すのです。

赤ちゃんが自分の顔や声が分かってくれると思えば母親も嬉しいし、同じ表情を真似してもらった大人も喜ぶでしょう。より好意的、積極的に赤ちゃんに働きかけるに違いありません。このように赤ちゃんは、周囲の人からより多くのコミュニケーションを引き出す力を持っているのです。　大人が育ててもらっていると言っても良いのです。この時期から、豊かなことばが作られていっているのです。そう考えてみると、コロナ禍の中にありマスクを付けた生活が、相手の表情を見ながら学習する力がつかないのではという危惧が起こっているのも事実です。

ことばは、人の心を表すものであり、その人の行動を形づくるものです。それゆえに「頭」だけの理解に頼った上滑りのことばではなく、”実感を伴うことば”からだをくぐり抜けた”実体を伴うことば”を育むことが大切です。

自然の中で、子どもたちが実際に体を動かし、体全体を使って、五感を研ぎすます経験。直接体験を通して感性を育み、心を動かす経験”が、からだをくぐり抜け、実感・実体を伴うことばとして育っていくのです。

「豊かな人間とは、豊かな言葉を体験し、それを心に残している人のこと」ということばを聞いたことがあります。
幼い時期に、回りの大人が、よい話し相手、よい聞き手となって、子どもたちと一緒に豊かな体験をし、言葉のやり取りで子どもたちと共に幸せな生活を創っていきたいものです。

副園長

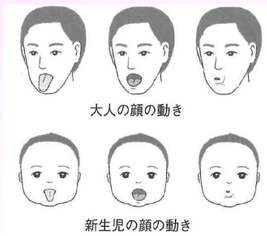

図2-6　メルツォフの模倣実験
（Melzoff, A. & Moore, K.，1977を基に作成）